乳幼児をもつ母親の育児困難
—その背景要因としての夫婦関係についての検討—
（分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究）

大　日　向　雅　美

要　　約

乳幼児をもつ母親を対象とした全国調査の結果、疲労感や子どもに対する苛立ちを強めている母親が多いことが明らかとなり、その背景要因が分析された。とくに日英比較調査から、日本の母親の場合には、夫の育児協力や夫婦間の精神的な対等性が不十分であることが精神的な不安定さを招いていることが考察された。乳幼児の母親たちの心理的な安定を得るためには、夫婦関係のあり方を検討することが今後の課題の一つであると考えられた。

見出し語

母親の育児困難　日英比較　夫婦関係

■　研究目的

昨今、育児に困難を覚え、子どもの行動に苛立ちを強める母親が急増している。乳幼児にとって、もっとも身近で頼るべき親が情緒的に不安定な状況にいることは、乳幼児の心身の発達を考えるときゆゆしいものがあり、その対策が急務と考えられる。

本研究は、母親たちが心身ともに安定して育児に携わることができるよう、育児支援のあり方を検討するものであるが、そのために昨今の母親たちが直面している育児困難状況の実態を把握し、その背景要因を明らかにすることを目的とした。

なお、母親たちの育児困難に関して、これまで実施してきた研究（大日向　1995）から、夫婦関係のあり方が母親の育児中の苛立ちを左右する要因の一つとして重要な意味をもつことが考察されている。そこで、本研究では乳幼児をもつ母親からみた夫婦関係に焦点を当て、母親の心理的安定に寄与する夫婦関係のあり方をさぐることを主な課題とした。

本報告は以下のことを内容としている。

研究Ａ：母親たちの育児困難状況とその背景要因に関する日英比較

A-1)乳幼児をもつ母親を対象として実施した全国調査から明らかになった、母親たちの育児困難状況の実態について。

A-2) イギリスの母親を対象とした育児意識の調査結果。とくに日本の夫婦関係との比較に焦点を当てて分析した結果について。

研究Ｂ：子育てをめぐる夫婦の意識のギャップ

母親の育児困難の一要因と考えられた夫婦関係について、とくに育児や相手に対する期待をめぐる夫婦間の意識のギャップを中心に検討した調査

恵泉女学園大学人文学部 (Keisen Jogakuen College, Faculty of Humanities)

結果について。

■ 研究結果と考察

研究Ａ：母親たちの育児困難状況とその背景要因に関する日英比較
研究Ａ－１：乳幼児をもつ母親たちの育児困難状況について

１．調査対象

育児雑誌３誌の誌上で協力を要請。調査票調査によって得られた有効数2,865名の資料について分析。なお、調査対象の一部を抽出して、聞き取り調査を実施中。

調査対象の母親の平均年齢は２９．３歳（父親は３２．４歳）。子どもの人数は１人が53.7%、２人が41.6%。母親の83.2%が専業主婦（父親の85.3%が会社員または公務員）。家族形態は71.7%が核家族である。

２．調査内容

主として、育児中に感じる苛立ちに関して。具体的には、育児をつらく思うことの有無とその理由、子どもを可愛く思えないことの有無とその理由、可愛く思えないときの子どもへの対応、子どもに対する気持ちの変化等である。

３．調査結果

調査結果の一部は表１～表６に示したが、結果の概略は以下のように要約される。

（１）８～９割の母親が「子どもを可愛く思えない」「育児がつらい」と回答している。しかし、それはいずれも「ときには」である。むしろ、子どもに対する気持ちとして「以前は好きではなかったが、今はいとおしい」が５０．１％となっており、子どもを育てる過程で子どもへの愛情を育んでいる母親も半数余りいた。子どもへの愛情を持ちつつも、ときには子どもが可愛く思えない、育児がつらいことがあると感じるのが、乳幼児をもつ母親たちの意識の実態と考えられる。

（２）しかし、子どもが可愛く思えない時、「いらいらして、思わず手をあげてしまう」と回答した母親が半数余り（55.1%）おり、さらに「あんたなんか嫌いと言う」などの言葉の暴力を投げかける母親も３割強（31.2%）いて、母親自身が苛立っているとき、子どもに対して心ない対応がとられがちな

母親意識の日英比較（研究Ａ－１・研究Ａ－２）

表１　育児はつらい仕事だと思いますか？

	日本	イギリス
まさにその通り	３．５	４３．８
どちらかというとそう思う	８８．４	３９．３
どちらかというとそうでもない		１０．０
まったくそうは思わない	８．１	５．０

（数値は%）

表２　育児の何がつらいですか？

	日本	イギリス
自分の時間がない	５０．０	６３．７
思うように外出できない	４３．２	３８．３
子どもが散らかす	３４．７	１５．９
おしゃれができない	７．３	２．５
しつけがわからない	２０．２	１８．４
お金がかかりすぎる	５．３	１７．９
夫が非協力的	９．０	４．５
姑などの周囲の干渉がわずらわしい	１２．０	５．０
自分は育児に向いていない	１２．６	１．０

（数値は%）

表３　育児に苛立ち、子どもがかわいく思えないとき、どうしますか？

	日本	イギリス
ほかのことで気分転換する	３９．３	２７．４
つい「あんたなんか嫌い」といってしまう	２４．７	
うるさくてわずらわしいと子どもにはっきり言う		５２．７
思わず手をあげてしまう	４３．５	６．０
子どもの顔をみないようにする	１３．４	５．５

（数値は%）

傾向が認められた。

(3)子どもを可愛く思えない背景として、以下の事項が考察された。

1) 母親一人で育児の負担を背負わざるを得ない状況

「自分の時間がない」「思うように外出できない」という制約が、育児をつらく思う理由の上位にあげられており、そうした状況に加えて「子どもが言うことを聞かない」「自分が疲れている」「子どもが外でぐずる」など、子どもの抵抗や母親自身の疲労で子どもをコントロールすることに困難を覚える場合に、子どもが可愛く思えなくなることが回答されていた。

2) 育児に対する期待と現実とのギャップへの戸惑い

「片づけても子どもにすぐ部屋を散らかされる」が、育児をつらく思う理由　の第3位にあげられている。子どもは汚すもの、子育ては汚れるものとする認識は薄く、育児中でもきれいな生活を維持したいとする生活観の一端がうかがえた。

また、子どもをもつ前に描いていた母親像は、「おやつにはケーキやクッキーを焼いて、手をかけて育てる母親」「どんなときにもやさしい微笑をた　たえた母親」「子どもに可愛い服を着せて歩くおしゃれな母親」などが回答の上位にあり、やさしくておしゃれで、手作り志向の育児を心がける母親をイメージする傾向が示されていた。マスメディアなどが伝える育児情報には、「育児のファッション化」といえる現象も散見される。育児や母親像が美化されればされるほど、育児の実態とのかい離もまた大きくならざるを得ず、実　際に育児に直面して「こんなはずではなかった」とがっかりし、子どもを可愛く思えない気持ちや苛立ちを招いていることが考えられた。

3)「育児が評価されない」という思いからの苛立ち

女性の社会参加が盛んとなっている今日では、家庭内で育児に明け暮れる生活に虚しさを覚え、そのことが日常的な苛立ちを強めているとする回

表4　あなたにとって、夫はどのような存在ですか？

	日本	イギリス
苦楽を分かちあえる人	52.6	74.1
男性として魅力がある	13.8	63.7
一緒にいると楽しい	44.6	76.1
信頼し、尊敬している	36.8	70.1
彼の妻であることに喜びを感じる	17.0	66.2
男性としての魅力はもう感じない	7.8	3.5
心が通じないことが多い	9.2	7.0
いないと経済的に困るだけ	12.6	2.0
子どもさえいなければ別れたい	5.5	0.5

(数値は%)

表5　夫にとって、あなたはどのような存在だと思いますか？

	日本	イギリス
苦楽を分かちあえる人	50.8	72.6
女性として魅力がある	7.9	65.2
一緒にいると楽しい	44.9	74.6
信頼し、尊敬している	9.9	65.7
妻として誇りに思っている	8.8	66.2
女性としての魅力はもう感じない	12.1	2.5
心が通じないことが多い	4.3	5.0
いないと家事に困るだけ	18.0	5.0
子どもさえいなければ別れたい	2.2	0.5

(数値は%)

表6　夫の育児協力をどのように評価しますか？

	日本	イギリス
十分協力的で満足	39.6	67.2
実際の協力は少ないが、精神的に支えてくれて満足	20.5	18.4
仕事が忙しくて、協力を求めるのは無理	13.8	
もう少し子どもに関心を示し、妻をいたわってほしい	10.0	7.5

(数値は%)

答が　多くみられた。

4) 姑等との人間関係の葛藤

姑や舅からの育児干渉や家庭内の人間関係の葛藤から精神的に不安定となり、それが子どもへの苛立ちとなっている事例も少なくない。

5) 夫婦関係の葛藤

育児に参加する父親が増えているといわれているが、実際は育児にまったく非協力的な父親も依然として多い。父親の育児参加がブームとしてマスメディア等でとりあげられている昨今は、かえって育児に非協力的な夫への不満を強める母親も多く、そのことが原因で子どもにあたる母親が多い。特に冷えきった夫婦関係にある場合に、母親が子どもに向ける苛立ちには深刻な　事例がみられた。

6) 精神的な対等性のない夫婦関係への苛立ち

とくに夫婦間に葛藤がない場合でも、全般的に夫婦関係に精神的な対等性が少ない傾向にあることが注目される。

母親自身（妻自身）から見た夫婦関係の回答には、「自分にとっての夫」も、「夫にとっての自分」も、いずれも「苦楽を分かち合える人」（前者52.6%・後者50.8%）、「一緒にいると楽しい人」（44.6%・44.9%）がもっとも多い。

しかし、夫婦間の信頼や尊敬となると、自分は夫を「信頼し尊敬している」が36.8%、「彼の妻であることに喜びを感じる」が17.0%に対して、夫は妻の自分を「信頼し尊敬していると思う」は9.9%、「自分を妻として誇りに思ってくれていると思う」は8.8%となり、2つの回答間の比率　に差が大きくなっている。自分たち夫婦は一緒にいると楽しく、苦楽を分かち合えると回答している一方で、夫婦間に精神的な対等性が少ないように妻　が感じていることが注目される。

次に、子どもを可愛く思えない気持ちと夫婦関係との関連性をみると、「可愛く思うことの方が少ない」と回答した母親は、「自分にとっての夫」「夫にとっての自分」のいずれにおいても、「苦楽を分かちあえる人」（前者34.8%・後者26.1%）「一緒にいると楽しい人」（34.8%・30.4%）という回答が少なく、「男性または女性としての魅力を感じない」（17.4%・26.1%）、「心が通じない」（26.1%%・8.7%）、「いないと経済的または家事に困るだけ」（26.1%・26.1%）との回答が多くなっていた。「子どもを可愛く思う方が少ない」母親の場合、夫婦間に精神的な絆が崩れている傾向がみられた。

研究A－2：イギリスの母親たちの育児状況

1．調査対象

イギリス　オックスフォード州在住の乳幼児をもつ母親を対象。オックスフォード州に所在するナーサリールームおよび育児サークル計21カ所に集まる母親を対象に調査票調査を実施。有効数201名。一部、夫婦を対象にインタビューを実施した。調査対象の母親の平均年齢は29.3歳、子どもの人数は1人が31.8%、2人が43.3%、3人が18.4%。89.0%が専業主婦である。

2．調査内容

調査票の内容は、上記の日本版調査票と同一のものを英訳して実施した。

3．調査結果

調査結果の一部は上記の日本の母親を対象とした調査結果と対比して、表1から表6にまとめて示しているが、その概略は以下の通りである。

（1）育児をつらく思うことがあると回答している母親の比率は93.1%で。日本の母親と同様に高い比率を示している。

（2）しかし、育児をつらく思う理由に関しては、日本の母親との相違が認められる。

まず、育児中は「自分の時間がない」とする回答が63.7%で、日本の母親に比べて13ポイント強高くなっている。イギリスの保育事情は、日本に比べて遅れており、乳幼児をもつ母親が就労する機会はきわめて限られている。母親が日中の育児の大半を担っている割合は日本以上に大きいといえる。しかし、「思うように外出できない」「子どもが散らかす」ことを理由としてあげる母親は、日本に比べて少ない。前者に関しては、後述するように、夫の育児協力が多く、夫婦単位の外出の機会にも恵まれていることが考えられる。後者に関しては、「子どもは汚すもの」「育児中は家が散らかることも仕方がない」とする回答が顕著であり、育児観に日本の母親との違いが認められた。

（3）育児に苛立ち、子どもが可愛く思えないときの対応にも、日本の母親との相違が顕著であった。

「ママは疲れているから静かにして」「あなたがうるさくて、私は不快だ」ということを、言葉で明確に伝えるとする回答が多い（52.7%）。一方、「手をあげたり」（6.0%）「あんたなんか嫌い」（0%）と感情的な対応をとるという回答は、日本の母親に比べてきわめて少ない。

（4）イギリスの母親は夫の育児協力に対する満足度が高い。「夫は十分協力的で満足している」とする回答は、日本の母親の39.6%に対し、イギリスの母親は67.2%である。

また、「自分にとっての夫」「夫にとっての自分」のいずれにおいても、相互的な充足感は日本の母親に比べて強くなっている。

「自分にとっての夫」「夫にとっての自分」のいずれにおいても、「苦楽を分かちあえる人」（74.1%・72.6%）、「一緒にいて楽しい人」（76.1%・74.6%）とする回答は、日本の母親に比べて20～30ポイント強高い。

さらに、「自分は夫を信頼し、尊敬している」が70.1%、「夫は自分を信頼し、尊敬している」が65.7%、「彼の妻であることに喜びを感じる」が66.2%、「夫は自分を妻として誇りに思っていると思う」が66.2%であり、いずれの項目においても、イギリスの母親の回答率は日本の母親に比べて50ポイント以上、高くなっている。

このように、イギリスの母親たちにとって、夫婦間の充足感、とりわけ精神的な対等性を自覚できる夫婦関係をもっていることが、育児を大変としつつも、子どもへの苛立ちは少なく、育児中の心理が安定していることの一因と考えられる。

研究B：子育てをめぐる夫婦間の意識のギャップについて

育児をめぐる夫婦の意識のギャップ（研究B）

表7　父親の育児・家事参加に対する好ましさの評定

次の各項目の育児家事に父親（夫）が参加することが「とても好ましい」と回答した人の比率

育児・家事	妻の評定			夫の評定		
	男として	夫として	父として	男として	夫として	父として
おむつをかえる	37.6	67.6	82.7	12.0	22.4	37.0
お風呂に入れる	66.3	84.3	93.1	39.7	50.0	67.8
着替えさせる	35.1	56.2	71.5	15.7	22.7	36.2
抱っこ・おんぶをする	53.8	73.7	88.0	33.9	45.6	61.0
ミルクや食事の世話	30.5	53.0	72.6	16.5	25.3	39.1
散歩	61.7	77.8	89.8	39.3	48.2	62.6
留守番	38.8	59.8	73.3	17.8	23.9	30.8
寝かしつける	33.4	53.8	69.4	15.0	21.0	30.9
遊び相手	71.0	85.0	94.0	43.8	54.3	69.3
しつけ	65.6	75.6	85.1	43.6	49.4	60.6
掃除	21.6	36.7	37.1	11.2	8.1	15.3
炊事	24.4	34.3	34.5	13.2	16.3	17.4
洗濯	15.7	22.8	24.4	9.6	11.3	12.8
買い物	26.4	38.3	40.0	16.9	22.8	24.5
ゴミ出し	26.6	42.0	40.6	17.4	21.8	23.3
妻の相談相手	86.0	92.1	90.7	57.6	65.9	65.1

1．調査対象

育児雑誌1誌の誌上で、乳幼児をもつ父母に調査票調査への協力を依頼。回収された回答の中から、有効数父母967組を抽出して分析を行った。

2．調査結果

夫として、妻としての評価、夫の育児協力に対する期待と評価など。

3．調査結果

調査結果の概略は以下の通りである。

（1）父親が育児・家事参加することの「好ましさ」についての評定（4段階）を、それぞれ「男として」「夫として」「父親として」の3側面から、夫婦に求めた結果は表7の通りである。

・家事に関する5項目「掃除・炊事・洗濯・買い物・ゴミ出し」への参加協力は、育児項目への参加に比べて低い評価が与えられている（好ましいとする回答が少ない）ことは、夫婦のいず

れの評価でも共通であった。

・一方、育児への参加協力の評定では、夫婦間に相違が認められた。夫は「風呂・抱っこ・散歩・遊び相手・しつけ」への参加を高く評価しているが、その反面「おむつの交換・着替え・ミルクを与える」、「留守番・寝かしつける」を行うことに対する評価が妻に比べて低い。こうした項目への夫の参加協力は、妻にとっては育児負担の軽減と自分の時間をもつことにつながるが、父親自身は参加協力を評価していない。

・育児家事項目への夫婦の評定値を因子分析した結果、夫婦間で次のような　相違が認められた。夫の評定値からは、「風呂・抱っこ・散歩・遊び相手」といった子どもの相手をすることと、「妻の相談相手になる」ことが同一因　子として抽出された。子どもの世話をすることと、妻の相談相手になることは、夫にとっては一種の家族サービスとして同じ意味内容のものとして認識されている。しかし、妻の評定値では、夫が子どもの遊び相手になることと、妻の相談相手になることとは別次元のものと認識されており、ここにも夫婦　間の意識のギャップが明らかであった。

（3）夫婦間で「女性として」あるいは「男性として」意識することの有無と、それが自己評価（母として、妻として、女として/父として、夫として、男として）にどのように反映されるかの関連性について、一元配置分散分析した結果、妻の場合、女性として意識する程度が高いもの程、妻として、女としての得点はもとより、母としての評価得点も有意に高い結果が得られた。夫婦間で女性としてのセクシャリティを確認する機会がある女性は、母親としても充足していることが示唆されている。一方、夫の場合は、自己評価は、必ずしも妻との関係の評価に反映されていない。おそらく男性の自己評価は仕事等での評価により多く依拠していることと推察される。妻は夫との関係に自己のあり方の多くを求めている一方、夫は必ずしも妻と向き合った関係を持っていない。こうした意識のギャップが、育児中の母親の精神的な不安定さを助長する一因と考えられる。

また、「育児にうんざりする」と回答した母親は、女性としての評定値、母としての評定値が有意に低いことがみられた。さらに自由記述には、夫婦関係に精神的な対等性がないことへの苛立ちから、子どもに心ない対応をとってしまうという母親たちの声もみられた。

■　まとめ

以上、研究A・Bを通して、今日の母親たちが直面している育児困難状況とその背景要因を検討した。研究Aが示したように、母親が直面している育児困難には、依然として母親が一人で育児の大半を担っている状況が明らかであった。母親を対象とした育児支援がさらに進められていく必要性が高い。とりわけ、子どものもう一人の親である父親の育児参加に関しては、近年、その必要性が各方面で指摘されているように、その推進の意味が大きいことは、本研究全体を通して認められた点である。しかし、本研究が明らかにした点は、父親が育児に参加する意義は、育児参加を通して夫婦間の精神的な対等性、および情緒的な絆が確立されてこそ意義があると考えられることである。この点は研究A－2において、イギリスの母親を対象とした比較調査において明らかにされた。また研究Bが示したように、女性として、妻として、夫から認められるか否かは、母親の精神的な安定と育児への充足感を左右する大きな要因と考えられる。母親のそうした精神的安定は、結果的に乳幼児の心理的安定に大きく寄与すると考えられることからも、乳幼児をもつ親にとっては夫婦関係の確立のあり方を検討することが今後の課題の一つであることを指摘したい。

■　参考文献

大日向雅美「子どもを愛せない最近の母親について」大日向雅美・佐藤達哉編『現代のエスプリ342　子育て不安・子育て支援』　至文堂　1996

付記

研究A－1の調査にご協力をいただいた育児雑誌は、「わたしの赤ちゃん」（主婦の友社）、「コモ」（主婦の友社）、「プチタンファン」（婦人生活社）である。また研究Bの調査実施に際しては、中山幸子氏、鈴木良子氏（主婦の友社）のご協力をいただいた。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要　約

乳幼児をもつ母親を対象とした全国調査の結果、疲労感や子どもに対する苛立ちを強めている母親が多いことが明らかとなり、その背景要因が分析された。とくに日英比較調査から、日本の母親の場合には、夫の育児協力や夫婦間の精神的な対等性が不十分であることが精神的な不安定さを招いていることが考察された。乳幼児の母親たちの心理的な安定を得るためには、夫婦関係のあり方を検討することが今後の課題の一つであると考えられた。